

グローバル化する若者文化（2）若者のグローバル意識の規定構造

東京学芸大学 浅野智彦

1 目的

本報告の目的は、「グローバル化する若者文化（1）」において説明のあった調査データを用いて、調査地点の違いに注目しながら、若者のグローバル意識の規定要因とその連関を明らかにすることである。

グローバル意識とここで呼んでいるのは、海外に出て学んだり働いたりすることに対する積極的な態度のことだ。「内向きな若者」が問題視されるのにもなって、このような意識についての研究も蓄積されてきた。

例えば、藤田智博は大都市部の若者を対象に時系列調査を用いてグローバリゼーションの進行がかえってグローバル意識を低めるという逆説を示唆した。河合淳子らは京都大学と浙江大学の学生を対象に留学意欲についての調査を行い、両大学で動機の構造に差異があることを見出した。園田茂人らはアジア諸国の有名大学の学生に調査を行い、留学についての意識の差異を明らかにした。加藤恵津子・久木元真吾は、ネット調査によって長期海外滞在経験の有無がどのような意識・行動の違いと関係しているのかを検討している。

また、藤田結子、加藤恵津子は、それぞれ文化的な活動や「自分探し」を主な動機として海外に滞在している人々に聞き取り調査を行った。彼らの動機づけが彼らをとりにくく社会的諸条件との間でどのような効果をもたらしているのかを明らかにしている。

これらに比較すると、本調査は二地点における一時点調査であること、比較的回答者の代表性が高いこと、統計的分析に適した設計であることが特徴となる。

2 方法

グローバル意識と対応すると考えられる質問項目から得点を作成し、これを従属変数とする重回帰分析を行なう。独立変数として、先行業績を参考にしながら、グローバル意識を規定することが予想される項目を投入する。具体的には、地域・性別・本人学歴・両親学歴・暮らし向き・友人知人数・性格変数・ソーシャルスキル得点・ソーシャルメディア利用・外国人との接触経験などである。特に、近年社会科学の分野においても注目を集めている性格に関する変数（いわゆるビッグファイブに関連する変数）を投入した点が先行研究とは異なる。

3 結果

全体をまとめて分析を行なうと杉並区の方でグローバル意識が高いこと、性格変数のうち革新性・好奇心・外向性などが効果を持つこと等がわかる。次に調査地による規定要因の違いをみるために杉並と松山とでそれぞれ重回帰分析を行ない、以下の結果を得た。松山では、母親の学歴、高校で外国人生徒と一緒に学んだ経験がグローバル意識と正に関連している。他方、杉並では、友人・知人数、性格変数がグローバル意識と正に関連している。

4 結論

以上の分析結果から、グローバル意識に対して、松山では家庭や学校など若者を取り巻く環境が重要な意味を持ち、杉並では友人・知人、性格などより本人のパーソナルな領域が重要な意味を持つと推測される。

文献

藤田智博、2015、「若年層の内向き志向」、『ソシオロジ』60巻1号

加藤恵津子・久木元真吾、2016、『グローバル人材とは誰か 若者の海外経験の意味を問う』、青弓社